



文献紹介

〈ePRO に関する論文〉

Title: Barriers and facilitators of electronic patient-reported outcome measures (e-PROMs) for patients in home palliative cancer care: a qualitative study of healthcare professionals' perceptions

Authors: Consolo L, Colombo S, Basile I, Rusconi D, Campa T, Caraceni A, Lusignani M.

Journal : BMC Palliat Care. 2023;22(1):111.

doi: 10.1186/s12904-023-01234-0.

PMID: 37542264

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37542264/>

【背景】緩和ケアにおける患者報告アウトカム（PRO）は、患者の日常生活に最も影響を与える症状の早期モニタリングと管理を可能にする。しかし、日常診療に電子患者報告アウトカム評価（e-PROM）を導入するにはいくつかの障壁がある。本研究では、在宅での緩和ケアにおいて e-PROM を実践する際の潜在的な障壁と促進因子について、医療従事者（HCP）の経験を調査した。

【方法】本研究は質的記述研究である。Grol の概念的枠組みに従って構成された 2 つのフォーカスグループからデータを収集した。ミラノの IRCCS Istituto Nazionale dei Tumori 財団の在宅緩和がんケアに携わる HCP が参加した。データは再帰的な主題分析を用いて分析された。

【訳者（YY）コメント】実務担当 CM からこの原稿確認依頼を受けた。解析担当 YY は「再帰的な主題分析」という言葉を初めて聞いたので、ひとまず論文「岡ら、日本看護研究会雑誌、2022, 45(2),145-158」を Web で見つけたので読んでみた・・・が、付け焼刃で習得できるものではないので、今回の解析に関する訳は十分ではない。和訳すれば「主題分析」になるのであろうが、岡らの論文にある「テーマティック分析」という言葉が適切のように思う。質的研究においてアンケート調査の結果（単語、文章）を体系的に解析する方法とされており、質問事項への回答に対し「コーディング」で整理し、コードから「テーマ」を生成する方法、とある。詳細は紹介した論文を参照してほしい。

【結果】合計 245 のコードが作成され、1 回目のフォーカスグループ（訳注 YY：2 回の調査を行い、それぞれをフォーカスグループと称していると思われる）では 171、2 回目のフォーカスグループでは 74 であった。結果は Grol のテーマ（訳注 YY：基本的考え方にあるテーマのここのようである）に従ってサブテーマ、経済的・政治的背景を除く、イノベーション、個々の専門家、患者、社会的背景、組織的背景、に細分化された。9 人の HCP が 1 回目のフォーカスグループに参加し、10 人が 2 回目のフォーカスグループに参加した。

これらの参加者によると、e-PROM は、導入のすべての段階で HCP に十分な訓練と支援を行えば臨床診療に取り入れることができるという。参加者は、特に腫瘍学的終末期という特殊性と無形のケア介入に起因する社会的・組織的背景における障壁を特定した。また、こ



これらのツールがもたらすイノベーションと患者および医療チームとのコミュニケーション改善のための多くの促進要因も特定した。

【考察】e-PROM は、HCP によって患者ケアと彼らの仕事に付加価値をもたらすものとして認識されている。しかし、特にこれらの患者の脆弱性、技術システムの適切性、教育不足、ケアの人間性低下のリスクに関連した障壁が残っている。

【訳者 (CM) コメント】日本においても ePRO の普及が叫ばれるが、未だ十分ではない。e-PROM は、「導入のすべての段階で HCP に十分な訓練と支援を行えば、臨床診療に取り入れることができる」とこの論文が述べるように医療従事者が率先して使用することで患者の苦痛症状の早期発見と治療やケアに利用したいものである。

【訳者 (YY) コメント】今回の解析は、(i) 回答から整理したコードをもとに、(ii) コードから整理したテーマを設定して回答から読み取れる結論を洞察する方法だと理解した。言語解析には他にもテキストマイニングといったものもあるが、今回の方法は単なる言葉の分類や発現頻度の評価だけではないのが特徴のように思う。



Background: Patient-reported outcomes in palliative care enable early monitoring and management of symptoms that most impact patients' daily lives; however, there are several barriers (障壁) to adopting (導入する) electronic Patient-reported Outcome Measures (e-PROMs) in daily practice. This study explored the experiences of health care professionals (HCPs) (医療従事者) regarding potential barriers (障壁) and facilitators (促進因子) in implementing (実践する) e-PROMs in palliative cancer care at home.

Methods: This was a qualitative (質的) descriptive study. The data were collected from two focus groups structured according to the conceptual framework of Grol. HCPs involved in home palliative cancer care of Fondazione IRCCS Istituto Nazionale dei Tumori of Milan were enrolled. Data were analyzed using a reflexive (再帰的) thematic analysis.

Results: A total of 245 codes were generated, 171 for the first focus group and 74 for the second focus group. The results were subdivided into subthemes according to Grol's themes: Innovation, Individual professional, Patient, Social context (背景), Organizational (組織的) context, except Economic Political context. Nine HCPs attended the first focus group, and ten attended the second. According to these participants (参加者), e-PROMs could be integrated (統合する、組み入れる) into clinical practice after adequate training and support of HCPs at all stages of implementation. They identified (特定された) barriers, especially in



the social and organizational contexts, due to the uniqueness of the oncological end-of-life setting and the intangible (無形の) care interventions, as well as many facilitators for the innovation that these tools bring and for improved communication with the patient and the healthcare team.

Conclusions: e-PROMs are perceived (気づく) by HCPs as adding value to patient care and their work; however, barriers remain especially related to the fragility (脆弱性) of these patients, the adequacy of technological systems, lack of education, and the risk of low humanization of care.